

## 子育てを通して ともに成長していきませんか!

今回は、子どもの「わがまま」について考えてみたいと思います。1・2歳児はいわゆる「イヤイヤ期」、第1次反抗期であると言われます。この時期をうまく乗り越えていくために、岩立 京子 先生から学びたいものです。

### わがままの境界線 ～乳幼児期編～

わがままと自己主張はどう違うの？

子どもが親から自立していくためには、自分の考えや思いを主張する「自己主張」が必要です。この自己主張とわがままの違いはどこにあるのでしょうか。自己主張は、相手の気持ちや考えがわかり、それを考慮した上で自分の思いを主張していくことです。わがままでは、相手の気持ちや考えがわかる発達段階になっても自分のことしか考えず、自分の思い通りにしようとするのです。

このように書くと、両者の区別は簡単そうですが、実は子どもへの愛情をかけ違えると、その境界線を見極めることがすごく難しくなります。

赤ちゃんは自己中心的だが

わがままではない

多くの親はわが子を初めて腕に抱いた時、何にもかえがたい喜びや感動に満たされます。子どもが泣けば、自分の食事を中断しても子どもにミルクをあげるし、料理を中断してでもオムツを交換するでしょう。

赤ちゃんは、親の都合など考えずに、自分の欲求不満を泣いたりむずかたりすることで表現しますが、親は、赤ちゃんを「わがままだ」とは思わないでしょう。なぜなら、赤ちゃんは未熟で、相手の言葉も気持ちもよく理解できないからです。親が子どもの発達を理解し欲求を満たしていくことで、子どもはさらに安心して、自分の気持ちや思いを主張します。

人の発達において、まずはこのように、安心して自分を表現できるということが大切です。なぜなら、このような関わりは、「自分が困ったときには、いつでも〇〇してもらえる」という親への愛着や安心感、信頼感を形成するのに不可欠だからです。

わがままの作り方

ただ、赤ちゃん期でさえ、親は赤ちゃんのすべての欲求を受け入れ、その通りにしているわけではありません。子どもがハイハイやつかまり立ちをするようになると、欲求はさらに募り、床に置いてあるティッシュをすべて引き出してしまったり、ソファの上にあるテレビのリモコンを壊してしまったりするかもしれません。そのような時、ティッシュの箱やリモコンを高い場所に移動し、赤ちゃんを抱きとめて「あーあ、こんなにしちゃって、ダメよ」などと、びっくりした表情で伝え、行動を抑制します。子どもはその時はすべて理解できなくても、徐々に親の言うことと自分の行動を結び付けて理解し、禁止されたことをしなくなっていきます。第1反抗期とも呼ばれる1、2歳代になっても、親は子どもをよりいっそう理解し、発達に応じた説得や抑制を根気よくしていくことが大切です。つまり、親は子どもを愛し、欲求を満たしてあげながらも、望ましくない行動には説得し、抑制していくことが大切です。説得や抑制をしないでただ溺愛し、過保護にしていけば、子どもは「自分の思い通りに何をやってもいいんだ」というわがままになっていくでしょう。



「保育で一番大切なことは『子ども理解』だと常日頃から話しています。子どもへの愛情に支えられた「子ども理解」に基づいた関わりによって、子どもたちはすくすくと成長していきます。また、「説得」という言葉が気になりました。「望ましくない行動の抑制を図るために、発達段階に応じた『説得』が大切であること、決して「叱責」ではないのです。今回は、これらのことを大切に、子育てをしていきたいものです。